

学部情報① 法学部



法学部独自の奨学金制度
「やる気応援奨学金」を利用した
学生の体験をご紹介します



ミャンマーの小学校にて

私は、大学2年次に「国際インターンシップ」を履修し、その一環でやる気応援奨学金をいただき、ミャンマーに2週間半滞在しました。ミャンマーではおよそ25のさまざまなアクター（関係者）を訪問し、インタビューを行いました。これらのアクターは、国際機関から現地の商店に至るまで、さまざまなレベルのものでした。ILO（国際労働機関）やIOM（国際移住機関）などの国際機関から、JICA（国際協力機構）やJETRO（国際日本ビュースの援助機関）などの日本ベースの援助機関、さらに国際NGOやローカルNGOまで多岐にわたっています。そのため、それぞれの予算や人員、活動の規模、立場、考え方、問題との向き合い方、切り口の方法など、多くの点で違いを感じる事ができました。

たとえば、国際機関や国際NGOなどは予算規模が大きいため、大規模なプロジェクトを行いやすいという側面があります。しかし、現地の人々による小さなNGOで働く人々などに話を聞くと、彼らのやり方に対する不満の声もありました。また、インタビューを通して、ミャンマーの発展に対する

情熱に多少の差があるのではないかと考えました。大規模な組織になるほど、全体的な事業が多くなるからか、問題とは距離を置き、より俯瞰的、理論的な見方をしているように感じました。

一方、現地のミャンマー人によつて運営されているNGOなどを訪問した際は、例外なく皆、ミャンマーの発展に対する情熱を熱く語ってくれました。私は、アクターのレベルの差異について以前から興味があり、今回の活動でそれを肌で感じ、考える事ができたのではないかと感じています。それぞれのアクターの立場の違いなどを踏まえ、よりよい活動、協力の形をつくっていくには何ができるのかについて、今後も考えていきたいと思っています。

私の研究テーマは、「Education for ethnic minorities（少数民族の教育問題）」と「Health Issue（健康問題）」でした。夏のフィールドワークに向け、春学期に事前リサーチを行いました。事前リサーチでは、インターネットや論文などをベースに知識を蓄え、疑問点の洗い出しを中心に行いました。

今回の活動はとても充実したものとなりました。ミャンマー滞在中はかなりのハードなスケジュールで、つらいと思うことももちろんありましたし、悩

ミャンマーでの学びと成長

かわだ
河田こはく

法学部政治学科3年
私立鷗友学園女子高校(東京都)出身



ミャンマーでインタビューをしたNGOの方々と(本人右端)

むことも多かったです。

インタビューは、英語で行うため、英語力は当然求められます。また言うまでもなく、主体的に質問をし、相手の考えを引き出すことが重要です。インタビューの準備、英語のインタビューについていくこと、相手の話に合わせて質問を投げかけたり、相手の思いを引き出したりすることなど、難しいことばかりでした。しかし、それ以上に毎日のインタビューで得られるものが大きく、成長できたのではないかと感じています。自分のなかで、日々のインタビューが昨日よりもいいものへと改善されているのが実感できていました。留学やボランティアとはまた違った中身の濃い経験ができました。

自己の成長として一番思うことは、人とコミュニケーションを取ることがさらに好きになったことです。約2週間ずつと英語漬けで過ごし、英語でのインタビューを行うことで、単なる語学力だけではなく、英語の運用能力が向上したのではないかと考えます。

さらに、今回の活動は、自分の今後のキャリアについて見つめ直すきっかけにもなりました。多くのインタビューのなかで、何人かのパワフルな女性たちに出会いました。彼女たちは

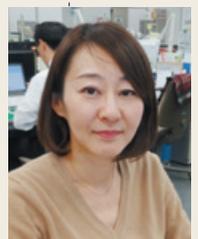
それぞれ明確な意志を持ち、プライドを持って働いていました。女性としての自らのキャリアについてかねて考えていた私は、気づくと自然に出会った女性に対して、それぞれのキャリアについての質問をしていました。引率のバーフィールド教授に助言をいただき、これが私の新たな興味分野であることが発見できたと同時に、私が目標とした人物像を以前よりもはつきりと描くことができるようになりました。たくさんの素敵な人々に巡り会うことができ、そのことにとっても感謝しています。

秋学期にはメールでさらに詳しく質問したほか、日本で働いているミャンマー人女性にもインタビューをしたりして、論文にまとめました。いくつかの新たな発見ができた以上に、これらの女性との対話は大変刺激的でかけがえのない財産になりました。

今回の経験では、今まで以上に自らの見聞を広めることができ、成長できたと考えています。自分の積極的な姿勢を保ちつつ、これからも多くのことに挑戦し自らを高めていきたいと思えます。最後になりましたが、「やる気応援奨学金」のスポンサーの方々からお礼を申し上げます。

父母懇談会でお会いしましょう

法学部事務室 小笠原直子



○ の原稿を執筆しているのは、
新入生をお迎えするための準備の真つ最中の時期です。お読みいただくのは5月ですから、1年生の父母の皆さまにおかれましては、ほんの数か月で「受験生の親」から「大学生の親」になり、環境も変わった時期かと思えます。

中央大学では毎年全国各地で父母懇談会を開催しており、昨年出席した際には、ご子女の日常的な大学での過ごし方をもっと知りたいというお声などをお伺いしました。同居していたとしても、まして二人暮らしをしていますと、独立した大人になりゆく過程にある大学生は、細かに友達や大学のことをご父母に話すことが少なくなる時期かもしれません。

大学での勤務では、生き生きとした学生さんに紛れてモノレールで通勤し、学食ではそつとテーブルを共有

させてもらっています。授業前後の学生さんたちはくつろいで友達たちの会話を楽しんでいる、あの先生はこんな風に学生さんから評価されているのかなど、興味深い「生の声」も自然と耳に入ってきます。学生さんとは窓口での受付などが公式な接点とすれば、非公式的にはこのような接点もあり、また大学生全体を膨大な調査資料や統計から俯瞰して眺めることもあります。我々はそれらの情報を携えて、父母懇談会へ出かけていきます。

ご父母の皆さまも「大学生の親1年生」からのスタートです。在学中、少しでも安心してご子女を送り出していただけまずよう、また、「中央大学生の親」としての生活が充実するものとなりますよう、どうぞ父母懇談会をご活用ください。